なぜ「仲間（ピア）」を信頼できるようになるのか？：

「矯正教育プログラム（薬物非行）」の質的分析（１）

○四天王寺大学　平井秀幸
成城大学　　南　保輔

１　目的

何らかの苦しみや問題を抱えた人に対する「支援」のあり方を考えるうえで、同じような苦しみを持つ「当事者」でもある「仲間」同士の支えあい（「ピア・サポート」）が関心を集めている。犯罪や非行からの社会復帰をめぐっても、近年、こうしたピア・サポートの重要性が指摘され始めている。特に最近では、自分と同じ元犯罪者に出会い支援を受けることや、自分自身が元犯罪者であるという経験を活かして支援をする側に回る、といったピア・サポートへの関与が「立ち直り」を促進することに注目が集まっている。

しかし、元犯罪者は「元犯罪者同士である」というだけで、ただちにピア・サポートの与え手／受け手となるわけではない。ピア・サポートが有する感情面のサポートという側面を重視しつつも、伊藤（2013）は、同じ経験を持つ「当事者」としての「仲間」に出会えばすぐに感情が好転するというものではない、と注意を促している。また、伊藤（2012）は、薬物依存からのリハビリ施設であるダルクの調査をふまえ、ダルクメンバーが他のメンバー（「仲間」）をポジティヴに意味づけることは決して自然な過程ではなく、ダルクが無条件の受容・承認の場として信頼されることが必要である、と述べている。

「仲間」はただちに信頼できる「仲間」ではないのだとすれば、問題経験を共有する「当事者」はいかにして他者を信頼すべき「仲間」として意味づけることが可能になるのだろうか。本報告は、おもにこうした問いを中心に、Ｘ女子少年院における薬物処遇場面を対象に社会学的観点から質的分析を行った。

２　方法

約三か月にわたって実施された「矯正教育プログラム（薬物非行）」プログラムの参与観察データとプログラム終了後から出院時点までのフォローアップ調査データ、プログラム開始初期において他のプログラム参加メンバーへの信頼の低さを語っていたＡ少年に対する縦断的インタヴューデータなどが活用された。

３　結果

分析の結果、Ａ少年は出院時点までに他のメンバーに対する信頼を見出し、かれらを「仲間」として意味づけていくことが明らかとなった。しかし、Ａ少年はプログラム内での他者による受容や承認の経験を経て、線形的に信頼を育んだわけではない。「仲間」に対する信頼構築過程は、寮内の人間関係や家族関係などプログラム外の出来事への意味づけと関わる複雑なプロセスであり、特定メンバーへの信頼／不信頼と矛盾しない両立可能なかたちで想像された「グループへの信頼」に基づいている可能性があることが示唆された。

４　結論

本報告では、必ずしも自発的に当事者が集うわけではない施設内処遇におけるピア・サポートの可能性と課題の一端について明らかにすることを試みた。また、そこから、ピア・サポートを「立ち直り」の資源として活用しようとする実践に対する臨床的インプリケーションについても試論的な考察を行った。

文献

伊藤智樹編著，2013，『ピア・サポートの社会学』晃洋書房.
伊藤秀樹，2012，「薬物依存における孤独と『仲間』」第85回日本社会学会大会当日原稿.